〔研究ノート〕

土佐光信の舞楽図屏風の謎

土佐光信は、15世紀中期頃から16世紀前期頃にかけて活躍した絵師です。天皇や足利将軍などに重用され、宮廷の絵所預（絵所のトップ）を長年務めました。「後円融院像」（雲龍寺蔵）、「清水寺縁起絵巻」（東京国立博物館蔵）などがその代表作として知られ、軽やかな描線や清明な彩色に特徴があります。土佐家は南北朝時代から江戸時代末まで長く続いた伝統あるやまと絵系の絵師の家系ですが、特に光信は土佐家の代表的絵師として後世まで高く評価されました。

作品は現存しませんが、江戸時代後期の文献で土佐光信の作としてしばしば言及されたのが、「舞楽図屏風」です。土佐家の分家筋である住吉家の七代目当主弘貫が江戸時代後期に編纂した『倭錦（本朝画事）』では、有名なやまと絵系の絵師の代表作を列挙していますが、光信の項では、「清水寺縁起」などと並んで「舞楽屏風」が挙げられています。また、地下官人諸家の系図を江戸時代後期にまとめた『地下家伝』の光信の項にも、屏風に舞楽を描いた作品が宮中の官庫にあることが記述されています。この光信が描いたという「舞楽図屏風」はどのようなものだったのでしょうか。

それを考える上で興味深い文献史料が、近年発表された古谷美也子氏の論文（※1）に取りあげられています。出雲大社の神職である佐草自清の記録『雑事随筆』（國學院大學図書館蔵、元禄7年〔1694〕）です。ここには、自草が狩野派の絵師である落合利兵衛に制作を依頼した「舞楽図屏風」は、禁裏造営の際に後水尾院の命によって土佐光信の屏風を狩野探幽が写したものを基にしていることが記されています。落合利兵衛筆「舞楽図屏風」（出雲大社蔵）は、A家本と言われる個人蔵の「舞楽図屏風」とほぼ同じ図様の六曲一双屏風です。同様の屏風が多く残されており、17世紀初め頃の制作と考えられるA家本が最も古様なため、これらの屏風はA家本系舞楽図屏風と言われています。図1がそのA家本で、六曲一双の総金地の画面に二十四曲が描かれ、楽舎の間に舞人たちが整然と配されています。

ところで舞楽図には、一つの画面に一曲のみを描いたものと、複数曲を描いたものがあります。同じ場所で同じ時間に複数の舞楽が演じられることは実際にはありませんが、舞楽は左方と右方がそれぞれの曲を何番が交互に演じることが基本のため、複数曲を描いた作品も求められました。現存作例では、13世紀中期頃の制作と考えられている北野天満宮蔵「舞楽図」が複数曲を一画面に描いた早い作例として知られています。北野天満宮蔵「舞楽図」は、もとは衝立の形状であり、三曲が描かれています。複数曲を描いた大画面の舞楽図の現存作例は、13世紀中期頃の北野天満宮本の次が、17世紀初期頃のA家本や桃翁筆「舞楽図屏風」（東京国立博物館蔵/三十二曲を描く）などであり、大きく時間があくのですが、近年の研究によって、現存はしないものの、13世紀末頃に二十数曲を描く舞絵（舞楽図）障子が制作されたことや、寛正3年（1462）に将軍足利義政の室町殿に多数曲を描いた舞絵障子が光信らによって制作されたことなどが文献史料から明らかになってきました（※2）。屏風ではなく障子絵ですが、光信が画業の初期に多数曲を描く舞楽図の大画面を描いていることから、二十四曲を描くA家本系屏風の祖本が光信周辺で制作された可能性もあると考えられます。

A家本系屏風と光信筆屏風を結びつけるものが他にもあります。A家系屏風の展開バージョンの一つで二十三曲を描く狩野安信筆の舞楽図屏風がありますが、同じ図様を写した東京藝術大学大学美術館蔵の模本の収納袋には「土佐光信筆」と記されています。また、先に挙げた『倭錦』の編者である住吉弘貫が写した「還城楽図」（東京国立博物館蔵）は、A家本系屏風に描かれる還城楽とポーズや衣装の模様がよく類似しているのですが（桃翁本とは類似しない）、「万治三庚子如月　土佐光信筆　禁中御屏風」という識語があり、この還城楽の姿が宮中の光信の舞楽図屏風に描かれていたこと、万治3年（1660）の模写をさらに模写したことを伝えます。ここから、万治3年時にA家本系屏風の祖本が宮中にあり、土佐光信筆と考えられていたことが窺えます（祖本は万治４年の禁裏火災で焼失したのかもしれません）。佐草自清『雑事随筆』も弘貫模本の識語も17世紀の認識を伝えるもので、宮中にあったという舞楽図屏風が本当に土佐光信筆なのかは不明ですが、A家本系屏風に描かれる陵王が、土佐光信筆「源氏物語画帖」（ハーバード大学美術館蔵）の御法帖に描かれる陵王の図様によく類似することも指摘されており（※3）、光信や、その画嚢を継いだ後継者の光茂の周辺で蓄えられた図様を基にしてA家本系屏風が成立していることが窺えます。ただ、総金地に多くの舞人たちが整然と配置されるA家本系屏風の幾何学的構図が、光信や光茂の時代まで遡るものかについては疑問が残り、より詳しい画風の研究も必要となります。

禁裏造営時に狩野探幽が祖本を模写したという『雑事随筆』の情報が正しいのかは分かりませんが、A家本系屏風は江戸時代前・中期に狩野派系の絵師によって制作されたものが多いことから、土佐家が宮廷絵所預職から外れていた16世紀後期から17世紀中期の間に、狩野家の絵師によって祖本が模写されたのではないかと考えられます。

（宮崎もも）

※1 古谷美也子「出雲大社の舞楽復興－落合利兵衛安成筆「舞楽図屏風」」（同『近世武家社会における舞楽図の研究』博士論文、筑波大学大学院人間総合科学研究科、2021年）

※2 高岸輝「足利義政室町殿の舞絵制作と土佐広周・土佐光信」（『東京大学史料編纂所研究紀要』13、2003年）、藤原重雄「伏見・大光明寺の舞楽図障子について」（『國華』1537、2023年）

※3 古谷美也子「ハーヴァード大学美術館蔵〈源氏物語画帖〉の舞楽場面について」（『風俗史学』70、2020年）



図1　舞楽図屏風　個人蔵（A家本）　☆みやこの舞楽展に出陳

季刊 美のたより No.232
令和７年 ９月 26日
発行 大 和 文 華 館

Copyright © The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.